

を欲しがって立って居るのか、も一すっかり用意が出来て居るに、貴様ばかりだ、さー、直ぐとお供をして来い』犬は尾を掉りながら答へました『なに、旦那様、私しは 疾っくの昔用意が出来てこゝで、旦那を待つて居る所なんですよ』

愚圖々々する人は、さまつて、自分よりも さつ
さとする人の事を 愚圖だといひます。

親猫と隼鷹

やまとの翁

三年飼つてやつても、三日しか恩を覚えて居ないとか、飼つてやるなら年季を定めて飼つてやるとか、猫のことは頼と善くいふ人が少いですが、猫

だつて、どーして、中々可愛いものです。

先づ、猫か朋輩のカナリヤを助けたお話は、誰でも知つて居ませう。夫から猫が子供を可愛がる事といつたら、また中々甚いものです、

アメリカのある處に、一匹の牝猫が澤山な子猫を一所にして、日當りの直い椽側で、種々に戯けさせて遊ばせて居りました。大きな三毛の親猫が平たくなって、さも心地善さ相に、仰向けになって四足を伸ばして寝て居ると、可愛い可愛い子猫が二匹許り、チヨコ〜ッと驅けて来ては親猫の長い尾の尖をつかまへて、上になつたり下になつたりして喜んで居る、すると残りの二三匹が、また其子猫の足を噛えたり、両手でつかんで立ち上つて見れば轉んだりして、何かなしに戯けて遊んで居ました。

所が其處へ以て、一羽の隼鷹が丸で電光の様な速さで空から舞ひ下つて來たかと思ふと、突然、何も知らずに遊んで居た子猫の一匹を引っかけ、再び虚空遙かに舞ひ上らうとしました。今まで一心に子猫を遊ばせて居た親猫は一目見るから、すわこそ我子の一大事よと、今飛びかけた隼鷹目がけて、奮然と跳び付いた。

隼鷹も此勢ひに吃驚して、折角捕つた子猫を捨て、更に自分の防禦に取りかゝりました。さて此戦争は中々激しかった。どしどし隼鷹の方で見ると種々な武器を持つて居る、其力の強い羽翼で以て無暗に猫の顔をたゝき付けて、鳶口の様な爪と嘴とで切りに攻撃するもんですから可愛相に、親猫は散々に苦しめられて、終々左りの目を一っくり抜かれました。

けれども猫も、子を思ふ一心から、中々此強敵に負けては居ない、此甚い痛手にも屈せず、流れ来る血を物ともせず彼方此方へ驅け廻り、驅けぬけて争つて居る間に遂に隼鷹の片々の羽翼を一つ噛み切りました。夫から尙暫らくは上になり下に成り、取つたり組んだりして大方半分許りも戦つても、何方も大弱りに弱つた時分、親猫は不意に一息ウンと方を入れて、噛み附いてやつとの事で敵を足の下に組み敷いて、丸で勇士が戦場が一番首でも上げたかの様に、鷹の首を噛み切つて仕舞ひました。

それから直に、子猫の側へ走つて行つて、隼鷹の爪で引つかれた可愛い自分の子の傷を一生懸命に甜めて居る、自分はどうかといへば、片一方の眼はくりぬかれて、顔中丸で血だらけになつて

居るに、其痛手には一向頓着して居ない。切りと子猫の傷を甜めては、残りの子猫どもを遊ばせて居る、子猫どもは、親猫がこれほどの危い目に出遭つた事などは、少しも知らないで、相變らず親猫の尾を捕たり、ぶら下つたりして可愛い顔して遊んで居ました。

● 笑 草

み ず 子

○田舎者 或る田舎者が郵便局に行きまして、手紙を發送としますと、『此れは目方が重過るから今一枚印紙を貼らなくてはいきません』とゆはれたので、眼を圓くし口を開いて驚げた様子でゆーには『ハア、印紙を貼れば目方が軽くなるんで

すけー!』。

○看護婦の頓智 『先生! 只今妙な病人が参りまして、大層苦がつて居ります、早く行つて診察をやつてください』如何したのだ? 『インキを飲んだので御座いますと』其の病人をどーして置いた? 『一時凌に吸取紙を二枚飲まして置きました』
「其では此方が行くには及ばす」。

○滑稽な答 某小學校の先生が或る時生徒に向ひ物は熱を受ければ膨脹れ、寒に遇へば收縮るとゆー事は解りましたか。解つた人は手を舉げて!』とゆいますと、一人の生徒が頻りに手を高く舉げますから、先生は『例を擧げて御覽なさい』と問いますと、其の生徒は起立して、『夏は日がのび、冬は日がちいまるじやーありませんか』と答へました。